

鶴田浩二 ★ 八千草薫の 魅 力 対 談

「殉愛」に共演して

- 記者 こんにちは。八千草さん、体が悪くて静養していられるとかきゝましたが……。
- 八千草 盲腸なの、“白夫人の妖恋”の撮影の最中から盲腸になっちゃって、あの最後の方の水につかるシーンの時は入院するかしないかの瀬戸際でしたの。でももういいんです。
- 記者 鶴田さん、東宝は何本目ですか。
- 鶴田 五本目くらいじゃないの、“武蔵”が二本と“若旦那と……”と。
- 記者 “若旦那と与太者”では鶴田さんの持味を両方面に発揮したわけですね。
- 鶴田 あれは飯喰ったあとアイス・ティでも飲みながら茶飲話でもしましょうという程度の写真で、苦労しなくてもいいから楽ですよ、しかしあゝという映画は高さが決っていて、それ以上よじ登ろうと思っても、あがれるようなものでないからつまらないね。
- 記者 今やっぺいらっしやる“殉愛”でお二人のコンビは二度目ですか。“武蔵”の時と。
- 八千草 あの時はワン・カットすれ違っただけなんです。画面の上では……。
- 鶴田 こっちは小次郎だし仇同志だからね。(笑声)
- 記者 (鶴田さんに) 今度の写真の原作は鶴田さんのお知り合いで、大分乗気がかゝられたそうですが。
- 鶴田 実は日記を書いた主人公の妹というのがうちのかみさんと同じ大船のラッキー・フェイスだったし、家も近くだった。これはその姉さんが自殺する五分前迄書いた日記なんだ。この人は戦争のさ中に海軍の士官と心中した。その事実だけを取りあげて、台本にはその原因その他の事は作ってあるんです。
- 記者 八千草さん、夫のために死を選ぶというような役は初めて？
- 八千草 現代物ではこういう芝居初めてです。
- 記者 たった一日だけでも愛する人の奥さんになりたい、そういうのどう？
- 八千草 私なんかもそうね。
- 鶴田 なかなか情熱型だ(笑声) そういえば、この役にしても、お通にしても、お蝶夫人にしても情熱型だな。
- 八千草 わたくし、今までわりと勝気でおてんばな娘役が多かったんですけど、それよりもいまのようなのが面白いですわ、面白いというよりそういう情熱型の女の人が好きですの。
- 記者 ラブ・シーンなんかありますか。
- 鶴田 ありますよ、そうとうしつこいのが……。でも夫婦ですからね。しょうがない(笑声)

八千草 私ラブ・シーンするの今度が初めてなんです。恋する役でも時代劇が多かったでしょう。一度「誘蛾燈」で友右衛門さんと同棲する役をやりましたけどラブ・シーンはなかった。

記者 接吻一つでもいろいろと研究しますか。

八千草 (恥しそうに) そんなことしりません。(笑) でもそういうシーンは、いきなりやるよりも、相手役の方と他のお芝居があつてからの方がいいですね。

舞台と映画

記者 八千草さん、いま舞台の方は一年に二、三回ですか。

八千草 いゝえ、決してません。今年は一月に出ましたでしょう。あとは決めてないんです。鶴田さん、宝塚ごらんになったことある？

鶴田 一番最初見たのが十五、六のときで、小夜福子や佐保美代子、外題はね(笑声)「モロッコの豹」というやつだよ。同級生にひっぱられて不本意ながら行ったんだけど(笑声)一番印象にのこっているのは色とりどりの洋服を着た女の子が休憩時間にゾロゾロと廊下に出て来た時、これはえれえとこだなと思った。それが一番鮮烈だね(笑声)最近では「女の学校」の撮影中、宝塚へ飯をくいに行った時、のぞこうかっていうので見たことがある。長谷川さんの娘さんが出てた。「四つの恋の物語(フォー・ラブ・ストーリー)」。

八千草 あゝ、あれ。私東京でやっていたんですよ。

鶴田 おれたち入ったらお客がふり返っちゃうから、いられなくて出ちゃって、浴場へ行って二十円かなんかの風呂に入ったよ(笑声)

八千草 宝塚で、映画スタアなんて見られませんからね。(笑) 大体東京のお客さんとあちらのお客さんとは全然違いますね。宝塚は家族連れで温泉や遊園地へ来た帰りに見るお客さんばかりで、何かムシャムシャたべながら見てるからこっちも気が楽といったら変だけれど、その気でやっちゃう。セリフなんかちゃんときいてくれない子供連れが多いんですよ。東京のお客様は女学生が多い。鶴田さんなんか舞台に立ってどう思います？

鶴田 もう三、四年ぐらい実演をやらないからわからないけれど僕は舞台は余り好かない。一日二日ならいいけれども、ロンダ・タイムで同じことばかりやってると僕なんか置いていかれるような気がするんですよ。早く撮影所へ帰って撮影に入らなければ遅れると思うんだ。

記者 よく新劇の人が毎日々々新しい発見を重ねて非常に楽しいといいますがね、八千草さんは？

八千草 えゝ、そういうことありますね。初めに舞台に立っていたからなのかもしれませんが。

鶴田 いや僕もおやじの(高田浩吉さんのこと)劇団でやっていたんですよ。おやじさんの立廻りからんで誤って竹槍で二度もおやじの頭をひっぱたいちゃってえらく怒られました(笑声)

記者 今じゃ逆に誤ってひっぱたかれる方(笑声) 舞台と映画とどっちが疲れますか。
八千草 撮影の時は神経を使いますからね。舞台の方がふとります。ダンスなんかやればやせますけれども、私なんてお芝居ばかりでしょう。

記者 鶴田さん、最近のご自分の映画で気に入ったものは何ですか。

鶴田 大曾根さんの「獄門帖」というのは大へん好きだったけれども評判が悪かった。演出も作品も……。しかし僕は立派な作品だと思うね。その他まあ佐々木小次郎だな。小次郎のもっているものは好きだね。捨てがたいよ。武蔵だって魅力のある男だけれど小次郎に比すれば問題じゃないね。だって武蔵には人間臭いところがないもの。小次郎は生の感情を持っているよ。映画というものはしわ一本で感情の表現がキャッチ出来るというところが魅力なんだよ。それには人間臭さが絶対の魅力だと思うんだ。しかし、僕は再映画化というものはあまり好きじゃない。最近又多くなって来たが、悪い傾向だよ。映画の使命なんてオリジナリティにあるんだから。ぼくが「湯島の白梅」をやったのも不本意ながらやったんです。会社側にいい企画がない。この半年、ぜひやりたかったという作品はないですよ。

記者 どんなものがやりたいんですか。

鶴田 今一番切実にやりたいのは「大炊介始末記、山本周五郎の。おもしろい話だ。

八千草 時代物の方が興味あるの。

鶴田 毎月ぼくは克明に小説雑誌よんでるんだけど、いいものがないんだ、現代物には。

八千草 私、モルナールの「お人好しの仙女」あれを是非やりたいわ。それから「なよたけ」は今度やれそうなの。「白夫人の妖恋」みたいな幻想的なのも好きなんです。あれは、私ラッシュ全然見なかったんです。完成試写で初めてみて、面白かったわ、自分が出てるってことも忘れちゃって……。

記者 俳優さんとしては意欲的なものばかりに出てるわけにはいかないでしょう。

八千草 それはやっぱり自分の好きなものにばかり出るということは出来ませんね。

鶴田 僕たちは少しでも何か人の胸に残るような映画を——大げさなことを言えば、映画というものを通して人生をくみとってもらおうとか、一つの正しいものの見方をしてもらいたいとか、それが宿命的な俳優の悲願なんだよ。それに向って驀進するのが一番忠実な努め方なんだよ。たゞ、日本の映画界のあり方が六社合せたってメトロ社に及ばないような現状なのだから、必然的に興行成績というのが問題になるわけですよ。それにくっついて食っているんだから妥協しなければならぬ。それも結構だけれど只おそろしいのはそれに麻痺しちまうことだな。おれは今妥協してるんだということを自分で絶えず意識していないと惰性に流されるんだよ。そしていざ本物にぶつかった時、手も足も出ない。そういう時が僕にもあった。

記者 そうすると独立プロをつくるとか……。

鶴田 全然ないね。よほど莫大な資産のある人がバック・ボーンにいない限り成立しないね。結局力のある処に頼れば、それはすでに独立プロじゃないんだもの。今度僕

「オレンジ運河¹」というのをやるんだけどサ、真向からアメリカ資本に反対してる。東宝じゃ出来ないし、大映はグランプリの関係上出来ない（笑声）

パパと一人娘

記者 （お二人の食事するのを見て） ところでお二人とも昼食としては割合油っこいものをおとりになるんですね。

鶴田 僕は朝食べないし夜食べない。飯は昼だけ——。夜はもう飲んじまうからだめだ。

記者 お酒の方は腕が上りましたか。

鶴田 上らないね、どんどん下るよ、年齢と共に（笑声）

八千草 年よりみたいなことって……（笑声）私は人とは逆で、夏油っこいものが食べられるんですよ。

鶴田 その割におふとりになりませんが（笑声）芯が強いのかも知れないね。

八千草 子供の頃弱かったの、宝塚へ入ってから強くなった。

鶴田 宝塚さままだね（笑声）僕は体重を落とすために野球やってるんだよ。もっと激しいことやりたいね。ゴルフなんて好きじゃない、一つ打つとトコトコ歩いていくなんて、時間が勿体なくてサ（笑声）

八千草 鶴田さんの球団ノン・プロ？

鶴田 僕が登録しているのは東京都軟式連盟ですよ。僕も一週に一度はやることにしてるんだ。一寸でも楽をするとだめだよ、グッと脂肪（あぶら）がふえちゃうから。いま十八貫、もう五百匁ぐらい落ちれば最適だね。それも興味を伴ったものでなきゃ続かないからね。そういう意味では野球は理想に近いよ。

記者 八千草さんは？

八千草 美容体操やってるの。

鶴田 ふとるために？

八千草 やっぱり足も細くなりたし、もう少し肩巾だって広くなりたし……あら、こんなこと書かないでね（笑声）

記者 いくら美人に生れても欲には限りありませんものね（笑）。ところで歌うスタアで商売になるのは鶴田さんだけだということですが練習が大変でしょうね。

鶴田 ところが何もしないんだよ。僕は声なんて大事にしないしサ、発声だとか、そんなものやったことないしサ、うろ覚えで行くんだよ。

記者 八千草さんは？

八千草 宝塚でやりましたけど……。

鶴田 あんな心臓の悪くなるようなことやる必要ないよ。自信がないから、不安定なんだな。

八千草 ほんとに心臓が悪くなる（笑声）

鶴田 おやじ（高田さん）さんは「お前の歌はど下手だ」って云ってるよ。僕もおやじ

¹ 7月24日、野球の試合で足首を骨折した等の理由で撮れなくなった。

さんのをうまいと思わないけどね、(笑声) レコード会社は必死になって宣伝するけれど。

八千草 私、「お蝶夫人」で歌ったでしょ、歌ったといっても吹替えで、私は口を合せるだけだけど随分苦労したわ。オペラの芝居って「間」が決ってるでしょ。そういう意味でとても難しかったわ。

記者 それはそうと、鶴田さん赤ちゃん御誕生だそうでおめでとうございます。お父さんになった感じはどうか。

鶴田 まだ猿みたいなもんですからね (笑声)

八千草 女の赤ちゃんでしょう。お名前は？

鶴田 愛弓……キューピットだよ。

八千草 ずいぶんロマンチックな名前ね。

鶴田 女だもの (笑声) しかし今の子は早いそうだね、育ちが。おふくろがそう云って「お前の時はこれくらいでまだ首がグニャグニャだった」今はもう持ち上げちゃうものな。何しろ二カ月も早く生れちゃったんだからたった六百七十匁だった。ガラスの箱に入れて、赤くなったり青くなったり。変なもんだね。

八千草 お父さん似、お母さん似？

鶴田 おれに似ている。すごく美人になるよ。(笑声)かみさん似じゃだめだよ。

八千草 そんなこと言っているの。

鶴田 かわいいけどね、小柄だから。でも決して美人じゃないよ。

八千草 とすると鶴田さんの美人というのはどういうのかしら？

鶴田 そうだなあ、ぼくは氷みたいに冷い人の方がきれいだと思う。

記者 とおっしゃっても、奥さんにする場合は又別らしいけれど、八千草さんなんかどうです。

鶴田 そりゃ、みにくいよりきれいな方がいいよ。年中見ていなくちゃならないのだから。問題はここのところ(胸をさす)だよ。ここが腐っているようなのはいくらきれいでもだめだ。

八千草 ええ、そういう人、顔にもあらわれているのね。

鶴田 やっぱり八卦みたいなことをいうね (笑声) 幻想劇が好きなだけある。(笑)

八千草 私、みてもらった時があるのよ(笑)

記者 で、どうでした？ 結婚のデマがとんだりしたけど……。

八千草 それは私だって人間ですから、いつかは恋愛も結婚も……。結婚については母も好きな人としなさいと云ってくれるんですけども、そういわれるとよけい責任を感じちゃって、おろそかには出来ない気がするんです。何しろ母一人子一人ですから。

記者 大分前八千草さんにきいた時に一生この仕事をする気はないように伺ったんですが……

八千草 お仕事がだんだん面白くなって来たんですね、結婚問題が起っても両方出来るならやっていきたいと今は思ってますけれど、その時が来なければ判りませんわ。私

の母って関西に長く住んでたもんですから東京に移ってから淋しいらしいですが、仕事が忙しくて一緒に旅行も出来なくて……。

記者 その点鶴田さんは奥さんとよくお出かけになるんでしょう。

鶴田 ジロジロ見られるから不愉快だって云っているよ。それに僕はタッタッと忙しく歩く方だから。とてもかみさんの機嫌なんかとれない（笑声）

記者 ファン・レターの整理は？

鶴田 親父がやってる。そういうの女房にやらせるの嫌なんだよ。大体仕事のことには一切口を出すなと云っている。変に口を出されると夫婦だから迷っちゃう。こっちは映画に関してはあらゆる意味で先輩だし、情熱もあるからね。大体僕は家ではきびしいんだ。うちに学生が大勢²いるけれど、規律のある生活をさせている。

記者 ではこのへんで。

（おわり）

² 野球チーム「鶴田ヤングーズ」の面々、脚本家「村尾昭」も大学入学からずっと下宿していたようだ。